

# 1章 「観る」

1章では、子どもたちの姿を「観る」ことに焦点を当てています。子どもをよく観ることで、子どもに寄り添う関わりや、子どもの立場に立った理解をすることができ、保育の工夫や成果を見取ることにつながります。

## 「観る」のプロセス

〈園内研修や保育レポートの参考に〉

- ① 目の前のありのままの姿を観て、実態を把握する。  
↓
- ② 実態を踏まえたテーマや課題をもって子どもの姿を観て、園の目指す子ども像を明らかにする。  
↓
- ③ 子どもの姿を見取るための観点をもって観ることで、子どもの理解を深める。  
↓
- ④ 園内の保育者間で共有した観点で子どもの姿を観て、子どもの実態を共通理解する。  
↓
- ⑤ 「保育の工夫」につなげて、子どもの変容や成長の過程を観る。

※ 上記の実践の具体例（ご紹介している園は本事例集の掲載園です）

- ①：鶴舞こども園は、子どもの「いいもの」「いいこと」など、遊びや思いを伝えたい相手とのやりとりの中で、「いい」で表現する姿に注目しています。
- ②：金城学院幼稚園は、子どもたちの実態を踏まえて、「科学する心」が育まれる活動や体験を検討し、「可塑性のある園庭作り」を通じて子どもたちの育ちを支えています。
- ③：中京もえぎ幼稚園は、子どもたちが夢中になって遊ぶ姿に注目して記録し、体験や育ちを捉えるとともに、心の動きを分析することで、発達の特徴を捉えることにつなげています。
- ④：第2長尾保育園は、「気づき」を観点とし、子どもの体験や変容の共通理解につなげています。
- ⑤：山梨学院幼稚園は、子どもたちが興味をもった対象に長期間関わる工夫をし、多様な体験を重ねて成長する姿を捉えています。

## 実践1：もし、カブトムシだったら（実態を観る）

(P.4)

進級して1ヶ月が経つ頃、「今年度の子どもたちは…」と、**実態を見取って話題にすると**、「おやつ配膳は、主張ができる子どもが中心になっている。他の子どもからの不満やトラブルが現れない」「虫を集めて身近で飼いたいのが、死んでしまうと関心が薄れる」「生活の決まりを守ることを優先され、片付けで作ったモノへの思いが大切にされない姿がある」など、子どもらしい発想や行動が感じ取れる姿が観られない実態が挙がりました。「子どもらしい興味や好奇心、自由な発想や行動が発揮されず、阻害されていることが、園生活の中にあるのではないか？」との**問題意識をもった保育者は、「ヒト・モノ・コトとの対話」に注目し**、子どもに本来ある「本能的な活動意欲」を阻害している要因を取り除く工夫をします。



「もし、カブトムシだったら…」「～してあげたい」など、車座になって話し合う。

## 実践2：水の色が変わった（観点をもって観る）

(P.6)

この実践は、「飼っているミノムシの糞で、水の色が変わったのではないか？」との疑問をもち、原因が「ミノムシの糞」だったら面白いと思ったことがきっかけになった色水遊びです。疑問が膨らんだことから、「ミノムシの糞」ではなかったことが分かるとガッカリする子どもたちですが、探究遊びはその後も続き、氷遊びにもつながりました。

「何で色水を作っているのか？」「何を使っているのか？」など、見えていることだけでなく、**子どもの「気づき」を観点として**、子どもの理解を深めています。興味の対象にどのような思いで繰り返し関わっているのかを見取ることで、**気づいていること、疑問に思っていること、確かめようとしていることなどを捉えています。**



紙も一緒に凍ってる。

## 【その他の事例の「観る」】

他の章で紹介している実践からも、「観る」ことの重要性を読み取ることができます。以下の3つの実践も、子どもを「観る」ことで、子どもを中心に据えた保育を展開しています。

### 実践5：「くろいの”って面白い！（子どもが注目する視線の先を観る）

(P.14)

戸外で遊ぶ2歳児。立ち止まって、地面をじっと見えています。

「園庭でたたずんでいる」と思い、「子どもの言動には意味がある」と、保育者がその姿に注目したことで、子どもが何に関心を向けているかを、保育者は捉えることができました。

まだ言葉での表現が難しい2歳児に寄り添って、子どもの遊びを「支える」援助をすることで、影の面白さや不思議さ、自分で影を作る面白さを楽しみ、「科学する心」が育まれる豊かな体験につながりました。



「“くろいの”ある」

### 実践6：水ってすごい！（モノとの関わりを観る）

(P.16)

室内遊びで使った樋を、砂場に持ち込んだ子どもたちは、水で流れる砂や、水の勢い、水の量など、様々なことに気づきながら遊びを楽しんでいます。「長い樋がほしい」と要望したり、「これで、そうめん流し遊びができる！」と発想したりして、子どもたちは自分たちで遊びをより面白くする工夫や発想をし、展開していきます。

保育者は、子どもたちの遊びへの興味や、モノとの関わりを見取り、遊びに必要と感じたモノを自ら取り入れられるような環境の工夫を重ねています。「水がこぼれちゃう」など、水が漏れて思うようにならない場面を逃さず見取ることで、子どもたちが繰り返している行為を理解するだけでなく、発想の豊かさを捉えることにもつながっています。



「長い樋で、流しそ  
うめんできた」

### 実践8：野菜ってどこになるの？（人との関わりを観る）

(P.22)

子どもが「行動したこと」や「知ったこと」を、“他者に伝えたくなり人と関わる”場面をよく観ることで、体験により「科学する心」が育まれた姿を把握できます。この実践では、ジャガイモの芽が出た発見やその喜びを、“畑の先生”である祖母に伝える場面があります。また、まだ青いミニトマトを採ってしまった4歳児と、それを見た5歳児が自身の経験を活かして話をする場面があります。子どもの姿を、直接体験の場面（点）だけでなく、関連する場面もよく観てつながりとして見取することで（点と点がつながった線で捉える）、確かな体験や成長した過程が明らかになり、子どもの理解へと進化します。



「まだ青いミニトマト、  
取っちゃった」

## 園内研修としての「観る」をご紹介！

ご紹介した事例のように、子どもの姿を「観る」ことは重要です。

この他にも、以下のような「観る」工夫がされています。

- ・ **自園の環境を観る** …………… 園舎、園庭の環境、他クラスの保育環境、教材庫、共有の場やもの、飼育栽培物
- ・ **保育者同士で共有し、観る** … 互いの保育、保育環境  
保育日誌、クラス便り、ポートフォリオ  
壁面装飾、掲示物
- ・ **他園の環境を観る** …………… 環境の特徴、自園の保育に活かせる環境
- ・ **他園の保育を観る** …………… 保育の特徴、自身の保育に活かせる関わり、援助
- ・ **他園の資料を観る** …………… 指導計画・指導案、展示・掲示物、実践をまとめた記録